

こま

小川未明

青空文庫

赤地の原っぱで、三ちゃんや、徳ちゃんや、勇ちゃんたちが、輪になつて、べいこまをまわしていました。

赤々とした、秋の日が、草木を照らしています。風が吹くと、草の葉先が光つて、止まつて、いるキチキチばつたが驚いて、飛行機のように、飛び立ち、こちらのくさむらから、あちらのくさむらへと姿を隠したのでした。

けれど、一同は、そんなことに気を止めることもありません。熱心に、こまのうなりに、瞳をすえていました。

この時刻に、学校の先生が、この原っぱを通り通ることがあります。みんなは遊びながらも、なんとなく、気にかかるのでありました。見つかれば、しかられやしないかと思うのであるが、また、こんなことをしたつていいという考え方、みんなの頭にもあつたのであります。

三人が、夢中になつてゐるところへ、

「おれも入れてくれないか?」と、ふいにそばから、声をかけたものがあつたので、びっくりして顔を上げると、それは、黒眼鏡をかけた紙芝居のおじさんでした。

「おれも仲間なかまに入ってくれよ。」と、おじさんは、遠慮えんりょしながら、いいました。

「おじさんも、べいをやるのかい。べいを持つているの。」と、勇ちゃんが、ききました。「ほら。」といって、おじさんは、ズボンのかくしから、光つたべいを出して見せました。「角かくのケツトンだね。」と、徳ちゃんも、三ちゃんも、たまげたように、おじさんのべいに目めを光ひらせました。

「おら、子供こどもの時分じぶんから、こまをまわすのが、大好きだいすきなのさ。」

おじさんは、三人にんの間へ割はつて入いるとかがみました。そして、むしろの上うえを見ていたが、「だれのだい、あのダイガンは?」

「あのベタガンは、三ちゃんのだよ。」

「おれは、あいつがほしいものだなあ。」と、黒眼鏡くろめがねのおじさんは、子供こどものように、三ちゃんの大おおきなべいに見みとれています。

「おかしいなあ、大きななりをして、べいをするなんて……。」と、徳ちゃんは、おじさんの顔かお見て、げらげら笑わらい出だしました。

「なにが、おかしいんだい。おら、子供の時分から、こまは好きなんだよ。それは、こんなのでなくて、木きのこまに、鉄てつの胴どうをはめたんだ。その鉄てつの厚あつみが広ひろいのほどいいとした

もんだ。あの、三ちゃんのダイガンを見ると、おれの持っていた、鉄胴のこまを思い出すよ。」と、おじさんは、いいました。

「その鉄の胴をはめた、こまをどうしたの？」と、勇ちゃんが、聞きました。
 「こつちへくるときに、友だちにやつてしまつた……。なにしろ、十五の暮れに出てきた
 んだものな。あれから十年も故郷へ帰らないのだ。」

「それで、おじさんは、こつちへきて、べいをしていたのかい。」

「じょうだんな、そんな暇があるかい。小僧こぞうをしたり、職工しょくこうになつたり、いろいろの
 ことをしたのさ。この商賣ひまをするようになつて、昔むかし、こまをまわしたこと思い出しう
 て、ときどきベいをするが、おもしろいなあ。」と、おじさんは、子供こどもといつしょに遊ぶ
 のが、なにより樂しみだといわぬばかりに、にこにこしていました。

「さあ、やろうよ。」

「よしきた！ しんけんべい。」と、おじさんが、叫びました。

力チンと、みんなが、手から繰り出した、鉄砲てつぱうだまのようなベいは、たがいにはじき
 合つて、火花ひばなを散らしました。おじさんのベいは、なかなか強く、輪わを描いては、うなり
 ながら、三人のベいをはね飛ばしてしまいました。

「おじさんの角は、すげえな。」と、三ちゃんは、白目を、くるりとさせました。

「そうさ。お宮の石垣や、コンクリートの道で、みがいたんだものな。このべいには、だれにも負けないと、いう信念が入つてゐるのだ。天下無敵というやつさ。」

黒眼鏡のおじさんは、三ちゃんのダイガンを負かすと、てのひらでなでまわして、喜びました。

「みんな、あすこの草の上へいつて、寝転ぼうよ、あめをやるから。」

おじさんは、そういつて、自転車についている箱から、あめを取り出してきて、みんなに分けてくれました。

仰向けになつて、高らかな空を見上げると、しみじみと秋になつたという感じがしました。小羊のようなくも、飛んでいくのを見送りながら、三人は、思い思に、おじさんの話を聞いていました。

「村に女の子で、お時といつて、おれとおなじ年の子があつて、こまもまわせば木登りも上手だつた。隠れんぼをすると、お時は、ぞうりをふところに入れて、家の前にあつた大きな木に登つたものだ。風があつて、枝が、ゆらゆら揺れていますのに、てつぺんまで上るのだから、だれも見つけたものがなかつたのだ。男の子とけんかをして、泣い

たことのない勝ち気な子だつたが、どうしたろうか。」

子供たちは、もうおじさんの話を聞いていませんでした。

「おじさん、また明日おいでよ。こんどは、僕が敵討ちをして、おじさんの角を負かしてしまふから。」と、三ちゃんが、いいました。

「ああ、いいとも。みんな待つていいな。」と、黒眼鏡のおじさんは、帰つていきました。
 その夜、月は、みがきたての鏡のように明るかつたのです。昼間子供たちの遊んだ、赤地の原には、虫の声が、いっぱいありました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 12」講談社

1977（昭和52）年10月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第5刷発行

底本の親本：「日本の子供」文昭社

1938（昭和13）年12月

初出：「小学四年生」

1937（昭和12）年10月

※初出時の表題は「独楽」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕一

2017年12月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://wwwaozora.gr.jp/>) で作られ

ました。入力、校正、制作にあたつたのは、ボランティアの皆さんです。

こま
小川未明

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>